# 磁祖・加藤民吉の足跡

瀬戸の大松窯の窯元・加藤吉左衛門の次男として生まれた加藤民吉は、当時の瀬戸窯を保護する窯屋仲間の取り決めのために家業の窯業を継げずにいました。そして父・吉左衛門とともに、名古屋の熱田で新田開発に従事していたところを尾張藩熱田奉行、津金文左衛門の目に留まり、彼の研究していた南京焼と呼ばれるやきものの研究を手伝うことになります。この南京焼こそ、いわゆる染付磁器のことでした。そして享和元(1801)年9月、ついに盃、小皿、箸立など小品ではあるものの染付磁器の製造に成功しました。しかし素地や釉薬など、まだ問題点は多く、肥前のような良質で高級な磁器を焼くことはできませんでした。

そのため、文化元(1804)年の早春、民吉は尾張藩や瀬戸の窯屋連中の支援の下、天草東向寺(曹洞宗)の天中和尚(愛知郡菱野村出身)を頼って、当時磁器生産の先進地であった九州へ単身修業の旅に出ます。そして苦労と努力の中で磁器素地の精製法、釉薬の調合法、丸窯による焼成法などを習得した民吉は文化4(1807)年に瀬戸に戻ってきました。

こうして民吉の帰郷によって伝えられた肥前磁器の製造法のおかげで、瀬戸の染付磁器は急速に進歩し、発展していきました。こうした業績をたたえ、民吉は瀬戸の「磁祖」として窯神神社に祀られ、毎年9月の第2土・日曜日には「せともの祭」が開催されています。

## 民吉年表

**安永元年 1772**
尾張国瀬戸村吉左衛門の次男として生まれる。

**享和元年 1801**
父吉左衛門とともに熱田にて新田開発に従事する。染付磁器の試焼を行う。

**文化元年 1804**
九州へ修業の旅に出る。

**文化4年 1807**
瀬戸へ帰る。

**文化5年 1808**
一代限り苗字を許される。加藤民吉と名乗る。

**文政7年 1824**
52歳で没する。

**文政9年 1826**
加藤民吉を窯神遥拝所に合祀する。

**加藤民吉像(窯神神社内)**
岐阜県に生まれ、日本芸術院会員・日展常任理事・日本彫塑会会長などを歴任した彫刻家である加藤顕清により昭和12年に制作されました。

# 民吉の九州ゆかりの地

加藤民吉は、文化元(1804)年2月に九州修業へ出発します。約1か月をかけて九州・天草に到着し、以後、天草・高浜の上田源作窯や三川内で修業し、最終的には佐々・市の瀬皿山(現:長崎県北松浦郡佐々町)の福本仁左衛門窯で修業し、磁器技法の習得に励みました。

## 佐々

**市の瀬皿山窯跡(長崎県指定史跡)**
民吉が約2年間修業した窯

**佐々町遠景**

**残心の杉**
民吉が佐々を離れる時に植えたと伝えられる

## 九州

## 天草

**高浜皿山窯跡**
民吉が九州で最初に修業した窯

**東向寺**
民吉の九州修業の拠点となった寺